

国際連携美術教育プログラムの開発 大学及び附属学校と海外大学との連携実践による

笠原 広一（東京学芸大学 美術・書道講座 美術教育学分野）

○嶽 里永子（東京学芸大学附属国際中等教育学校美術科）

清野 泰行（東京学芸大学 美術・書道講座 美術分野）

花澤 洋太（東京学芸大学 教育実践創生講座教科領域指導プログラム）

高田 慎之佑（東京学芸大学附属国際中等教育学校美術科）

小島 菜緒子（東京学芸大学大学院教育学研究科教職実践専門職高度化専攻）

福田 真子（東京学芸大学大学院教育学研究科教職実践専門職高度化専攻）

和久井 智洋（東久留米市第二小学校）

代表者連絡先：kasahara@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】美術教育 / オンライン授業 / 異文化理解

1 はじめに

本研究は、大学および附属学校と海外大学との連携による国際連携美術教育プログラムの開発を目的とする。新型コロナウイルスの感染拡大により大学では2020年度4月からオンライン授業が始まった。それ以後オンライン会議システムを活用して遠隔地の大学との共同研究なども進んだ。この間に行われたオンラインによる海外機関との連携を大学教育と学校教育へと展開する美術教育のプログラム開発を行なった。

2 本プロジェクトの目的

コロナ禍を経てオンライン授業の広がりなど、学校教育や教員養成を取り巻く環境は大きく変化した。Society 5.0 への移行、SDGs への対応、そして国際紛争など、それに対応する教育も一国内に収まるものではなく、様々な分野の知を横断的・統合的に繋ぎながら国際協働によって対処していく時代となる。そうした状況のなか、本学附属国際中等教育学校（以下、国際中等）と本学教員養成が連携したプログラム開発も重要になってくる。本研究は教科教育（笠原）と教科専門（清野・花澤）が、国際中等美術科担当（嶽・高田）、教職大学院生（小島・福田）、海外大学の研究者と連携し、国際連携美術教育プログラムを開発し、その知見を公立学校へ展開（和久井）した。

3 本プロジェクトの実施

二年間の中で複数の海外大学の研究者との授業やワークショップの実践、フィールドワーク、大学でのレクチャー等に取り組んだ。以下にその内容を示す。

（1）2022年度（1年目）

初年度はスウェーデンのマルメ大学からエワ・バーグ上級講師が来日した。来日前のオンライン・ワークショップ、来日後は大学でレクチャー、フィールドワーク、附属学校で対面ワークショップを行った。

1）オンライン・ワークショップ「Open Our Hearts!」

日時等：2022年6月14日（火）・21日（火）国際中等・マルメ大学にて（オンライン）

来日前に DP 美術（5年生）を対象に国際中等とマルメ大学をオンラインで結んでバーグ講師による

ワークショップを実施した。「Open Our Hearts!」と題し各自がハート型の作品を絵やタブレットで制作し、オンライン上で組み合わせて四つ葉のクローバーをデザインした(図1)。

2) 版画実践のための和紙工房へのフィールドワーク

日時等: 2022年11月17日(木)~19日(土)

版画による美術教育実践を開発するために福井県等で和紙工房の現地調査を行なった(清野・笠原・パーク)。越前和紙の里、紙の文化博物館、岩野平三郎製紙所、岩野市兵衛紙漉工房での和紙漉き、箔一(本店箔巧館)や富山県水墨美術館で日本美術の技法調査を行なった。

3) 大学でのレクチャー「スウェーデンの美術教育とアートに触れる」

日時等: 2022年11月24日(木) 9:30-11:30 本学美術科教育演習室にて

スウェーデンの美術教育と自身の作品制作についてパーク講師に講演を行ってもらった。大学教員や大学生、大学院生ら18名が参加した。

4) オンサイト・ワークショップ「One Minutes Sculpture」制作

日時等: 2022年11月29日(火)・30日(水) 国際中等にて

パーク講師によるワークショップ「One Minutes Sculpture」をDP美術(5年生)と実施した。身体を使って彫刻を作る活動で(図2)。制作後に撮影し、環境と身体と表現の工夫等について鑑賞した。

5) 版画の連携実践「書票」制作

日時等: 2023年1月23日(月)~3月6日(月) 国際中等にて

本学教員(清野)が国際中等教員(高田)と書票(Exlibris)がMYP美術(1年生4クラス)を対象に、生徒の身の回りの日常の風景や生活を版画で制作し、書票にする授業を実施した(図3)。

6) 木版画の刷りの実演

日時等: 2023年3月9日(木) 2・3校時 国際中等

本学教員(清野)がDP美術(5年生)を対象に木版画を刷る実演を行った。書票制作で関心を持った版画や浮世絵をさらに深く義方面から理解する機会となった。

7) 成果と課題

パーク講師と大学教員(清野)が専門とする絵画領域の活動を基に、浮世絵や版画に関連した実践となった。生徒や学生はもちろん教員にとっても日本の美術や文化を学び直す機会になった。スウェーデンとのオンライン実践は時差の関係で授業時間での実施が難しかったが、アカデミックな交流、附属学校でのオンラインとオンサイトの実践など、多くの活動を具体化できた。

(2) 2023年度(2年目)

2年目は、韓国の漢陽大学からキム・スナ教授、カナダのノバスコシア美術デザイン大学からニコール・リー講師、メルボルン大学からティン・ニュアン氏が来日し、レクチャー、フィールドワーク、附属学校でのワークショップを行った。

1) 講演会

日時等：2023 年 6 月 13 日(火) 本学美術科教育演習室にて

学部の美術教育演習受講者（19 名）を対象に、キム教授から異文化間交流の研究について講演をしていただいた。ニコール・リー講師からは大学院での実践を紹介してもらった。

2) 「Cross Differences: Pathways to Cultural Diversity」 オンサイト・ワークショップ

日時等：2023 年 7 月 10 日(月) 5・6 校時 国際中等にて

文化的多様性理解のためのワークショップ「Cross Differences: Pathways to Cultural Diversity」を DP 美術（5 年生）対象にキム教授に実施していただいた。物事の違いを視覚情報から読み取る活動や絵本でのディスカッション、同じ紙でつくった作品の違い等を鑑賞した（キム・嶽・笠原・小島）（図 4）。

3) 「Exploring virtual reality through artistic expression」 オンサイト・ワークショップ

日時等：2024 年 1 月 29 日(月)・2 月 19 日（月）放課後 国際中等にて

ニュアン氏を講師に、生徒個人の自己理解と相互理解を促す美術制作活動として VR デバイスで自分の特性や背景を特徴とするアバターを制作と鑑賞を行った（ニュアン、笠原、福田、小島、嶽、内谷）。

4) 「One Minutes Sculpture」 オンライン・ワークショップ

日時等：2023 年 2 月 8 日(木)・3 月 7 日（木）・8 日（金）東久留米第二小学校

バーグ講師をオンラインでゲストに迎え、公立小学校 6 年生 3 クラスで「One Minute Sculpture」のワークショップを行った（パーク、小島、和久井、笠原）。

5) 成果と課題

普段の美術科の授業では異文化理解はあまり馴染みがなかったため、多くの示唆を得た実践となった。VR を用いたワークショップや公立学校での実践など複数の新たな取り組みを具体化できた。これらの内容も 2023 年 9 月にトルコで開催された InSEA（国際美術教育学会）で発表した。



図 1. ハートの作品 図 2. 撮影中の生徒 図 3. 版画作品の例 図 4. 紙の造形作品紹介

4 成果と課題

これらの実践を通して次のような成果や知見が得られた。

(1) 連携実践の体制や内容

オンラインとオンサイトを併用して複数の国際連携の美術教育実践を具体化することができた。来日する研究者の受け入れは先方の都合もあるが、オンラインを併用して実施する場合もある。来日した場合にどの程度の活動が可能かはケースによるところがある。異文化理解というテーマは今後、美術教育でも重要になると考える。引き続き海外の研究者等との連携の機会をとらえて取り組んでいきたい。

(2)大学の教科専門と教科教育の融合的な取り組みの充実

大学と大学院でレクチャーやワークショップを実施してもらったり、共同実践をきっかけに教科専門と教科教育の教員が連携することで表現や制作に深まりや厚みが増すなどの効果も生まれた。

(3)附属学校の教育リソースの充実化

来日する研究者はかなり多忙で、学校での授業を経験した者ばかりではないため、条件や研究上の関心、経験等からできる場合に限られるが、教員にとっても異なる文化的背景や専門分野をもつゲストとの活動で新たな見方や表現の可能性に触れ、生徒達の芸術的な視野を広げる機会をつくることにもなる。

(4)公立学校への展開可能性

取り組みの一部を公立学校の授業と連携して実施することができた。言語面のサポートなどハードルはあるが、今後こうした実践が美術教育において実施していけることがわかった。

(5)今後の課題

附属学校、大学、来日する研究者の日程や内容の調整をどう行っていくかがも課題である。日程が合うとしても、学校のニーズと適合しなければ相互に負担になる。少ない回数での実践となるため評価も含めて普段の活動に組み込んでいくには限界もある。しかし、こうした活動を在学中に複数回体験することで何を学ぶことができるのか引き続き検討していきたい。

(6)さいごに

コロナ禍によって始まったオンライン授業などの新たな取り組みは国境を超えた美術教育の実践と研究開発を促進することができる。特に美術は各国の文化的背景に根ざしながらも言葉や地域を超えた共通性も有している。美術を通して共に感じ、考え、表現し、相互理解を促進することを通じて切り拓くことができる新たな教育の可能性を今後も模索していきたい。

謝辞

活動に参加した生徒・学生院生、海外大学の研究者、大学附属学校関係者の皆様に感謝します。

成果発表

論文等

小島菜緒子、福田真子、嶽里永子、高田慎之佑、笠原広一（2024）. 国際バカロレア美術科 MYP における IDU 実践と教員間の連携―敷き詰め題材を実践した教員達の視点から―, 日本美術教育研究論集, 公益社団法人日本美術教育連合 57 号、171-182.

嶽里永子、高田慎之佑、笠原広一、清野泰行、花澤洋太、小島菜緒子、福田真子、和久井智洋（2024）「国際連携美術教育プログラム開発の取り組み―海外 4 カ国の大学教員と附属学校と大学との連携実践」『国際中等教育研究』東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要、大 17 号、pp. 139-144.

学会発表等

Ewa Berg, Koichi Kasahara, Yasuyuki Kiyono, Rieko Take, Shinnosuke Takada, Naoko Kojima (2023). Blended Collaboration: Blended/Hybrid Art Classes in Art Education in Sweden and Japan. InSEA World Congress 2023, Çanakkale, Türkiye (2023/09/07).

小島菜緒子、福田真子、嶽里永子、高田慎之佑、笠原広一（2023）「国際バカロレア美術科 MYP における IDU 実践と教員間の連携―敷き詰め題材を実践した教員達の視点から―」第 57 回日本美術教育研究発表会 2023 研究概要集, 東京: 東洋大学 (2023/10/08).